助動詞「た」が確立した時期の調査

齋藤 大志　23B11260
東京工業大学 工学院

1．はじめに

日本語の歴史において過去のことを表す助動詞はかつて「たり」「り」「ぬ」「つ」など複数あったが、そのうち「たり」は「た」に変化し他は専ら使われなくなった。本論文では「たり」が「た」に変わった時期を調査し、日本語がどのようにして現代のような形になったのか、その変遷を探る。

2．調査方法

日本語の歴史について書かれた本を読んで「た」が登場した時代を特定する。また、実際に文献を読んで「た」が登場するものを探す。

3．結果

助動詞「た」が文中に用いられている文献を複数確認することができた。以下、その中でも年代が古い３つをあげる。基本的には原文を引用しているが、紙面の都合上「･･･」で一部を省略している。

①1593 年出版『ISOPONO FABVLAS』 ※1

「･･･ſono jucuxiuoba nanto vomôte totte curŏtazoto qexiqiuo cayete xicararureba: ſonotoqi Eſopo coreuo qijte funbetua xitaredomo, ･･･」

通称「天草版伊曽保物語」と呼ばれる、キリシタン版の一つ。「その熟柿をば何と思うて取って食らうたぞと気色を変えて叱らるれば：その時 Esopo これを聞いて分別はしたれども」と書いてある。

②1629 年出版『醒睡笑』

「･･･かねをつけられたかと問ふ。」

「･･･そちが盗みたるといへば、･･･とりはせぬ、人の見ぬにもらうたと。」

それぞれ「自堕落」「廃忘」より。

③1802 年出版　十返舎一九『東海道中膝栗毛』

「『･･･鮒がそうめんをくふのかとおもったー･･･」

「『ヲヤいつの間にもつてきたドレ／＼･･･」

ともに初編より。また、「／＼」は縦書きの踊り字を表す。

4．考察

調査の結果、1593 年、1629 年、1802 年の文献に「た」が登場することを確認できた。よって「た」は遅くとも 1593 年には使われており、それ以降はずっと現代と同じ使い方で使われていると考えられる。

一方、多くの文献において、地の文及び間接話法の会話文では「たり」、直接話法の会話文では「た」を使う、という使い分けがなされている（実際①②では「た」「たり」が近接して登場する）。さらに、長い間書き言葉は漢文や擬古文体が主流で話し言葉とも乖離していたため、「たり」は比較的最近である明治時代の文献にも登場する。このため話し言葉としての「たり」が消滅した時代を特定するのは難しい。

5．結論

文献を調査した結果、日本語の助動詞「た」は遅くとも 1593 年には口語で使われ始めていたということが分かった。

参考文献

倉島節尚(2019)『中高生からの日本語の歴史』筑摩書房

沖森卓也(2017)『日本語全史』筑摩書房

安楽庵作伝,鈴木棠三(1964)『醒睡笑』平凡社 ※2

十返舎一九,中村幸彦(1995)『東海道中膝栗毛』小学館 ※3

※1：大学共同利用機関法人人間文化研究機構 国立国語研究所が公開している『天草版伊曽保物語』（大英図書館所蔵）の画像データ及び同研究所が公開している文字起こしより引用。

※2･3：ともに一人目が原典の作者、二人目が訳者。